

●●●●●●●●●●  
書 評  
●●●●●●●●●●

「火星への旅」パイキング号の記録

宮本正太郎 著

(駿々堂出版, 昭52年3月10日, 142頁, 500円)

米国航空宇宙局が発表したパイキング関係の写真をふんだんに配して、さらっと書き流した感じの火星入門書で、グラビアの部分が90頁近く、本文は50頁前後、ばらばらっと見るだけでも、最近の火星の知識がわかったように感ずる気らくさがある。

著者は、我国でも著名な火星の観測者で、そのキャリアは、十分に導入部でうかがわれる。また、惑星間飛行の原理にもふれ、飛翔体によって地球をはなれ、宇宙旅行のプロセスを一つずつ踏んで、読者を火星の世界へと導く。

私の子供の頃、火星は遠い憧れの世界であった。その頃本書の著者は、繰りかえされる火星大接近の折、火星表面の異常(砂嵐)をいち早くキャッチしている。いま、無人とはいえ、火星旅行は実現し、そのペールは切っておとされたが、地球からの観測にもとづいて下した結論のいくつかは、実証された。ここに、観測の勝利がある。しかし火星のオービターやパイキング等によって発見された事実は、あまりにも多い。遠く地球からみて想像したものの中には、多くの思いちがいや、時に全く想像をしなかったことがらもある。

火星にもクレーターがあって、しかし運河は存在しなかった。しかも、このクレーターは、地球上でみられる火山性のものとは、様相が大きく異っている。「著者がクレーターは隕石のあけた孔だという説がアメリカではやっています。」というくだりは、少し表現が素直でないが、行間に、著者の学問的立場がうかがえて面白い。むしろ、いくつかの思いちがいに固執せず、開かれつつある、新たな惑星探査に基づいた事実に襟を開く著者をたたえたい。

本書は、火星のような高等動物の存在こそあきらめても、火星には、宇宙生物学的な重要性が依然として大きいと、その夢を明確にして筆をおいている。いま私は、天文月報の依頼を受けて、この書評を、ロケット実験に向うため急ぎ乗ったエア・バスの中で書いている。折、あたかも、夏休みの最中、里がえりの母と子供達で、いっぱいである。飛行機は、いつもと変わらず、悠々と離陸したが、ふっと一瞬、これが21世紀の夏休火星旅行ではないかという錯覚を感じた。未来を荷負う青少年が一人でも多く、本書のような書物にふれ、太陽系の知識を深めてゆく糸口になってもらいたいものだ。

(東北大理 大家 寛)

●●●●●●●●●●  
新 刊 紹 介  
●●●●●●●●●●

ヘベリウス星座図絵

藪内 清 訳・解説

地人書館発行・A3版・150頁・定価4500円

ヘベリウスはポーランドのダンチヒで1611年に生まれた観測天文学者であった。肉眼による観測を行い1464個の星を含む星表を作っている。さてこのヘベリウス星座図絵が出版されたのは1690年で、彼の死後のことであった。この星座図絵はソビエト連邦・ウズベク共和国科学アカデミー所属の天文研究所が首都タシケントの開都2500年を記念して1968年に復刻出版されたものを、藪内 清氏の訳・解説で発行されたものである。今まで、我々に最も親しまれていた古星図は、イギリスのグリニッジ天文台の初代台長フラムステッドによるものがあつた。このヘベリウス星座図絵は天球を外側から描いたもので、現在の星図と大きく異っている。手元におき、折にふれて広げて見るのも楽しいことではないかと思う。1968年に地人書館・故上条会長が入手されていたものであるが10年目に初めて日の目を見ることになった。

(香西洋樹)

1977年9月の太陽黒点 ( $g, f$ ) (東京天文台)

1	5,	12	6	3,	19	11	4,	15	16	3,	79	21	3,	54	26	4,	47
2	3,	14	7	3,	9	12	3,	60	17	3,	85	22	—,	—	27	4,	31
3	3,	30	8	—,	—	13	3,	64	18	—,	—	23	—,	—	28	5,	32
4	2,	25	9	—,	—	14	—,	—	19	—,	—	24	3,	37	29	7,	37
5	2,	24	10	3,	27	15	2,	85	20	4,	64	25	6,	32	30	5,	34

(相対数月平均値: 54.7)

昭和52年11月20日	発行人	〒181 東京都三鷹市東京天文台内	社団法人 日本天文学会
印刷発行	印刷所	〒112 東京都文京区水道2-7-5	啓文堂 松本印刷
定価 300円	発行所	〒181 東京都三鷹市東京天文台内	社団法人 日本天文学会
		電話 武蔵野 31局 (0422-31) 1359	振替口座 東京 6-13592